呉濁流『アジアの孤児』論
——その地政学的配置とジェンダー——

李　　郁　蕙

一　問題の所在

本稿で扱うテクストは，初出は『胡志明』という題名で見られたが，中国語訳に先駆けて日本で刊行されるにあたり『アジアの孤児』から『歪められた島』の改題を経て，最終的には『アジアの孤児—日本統治下の台湾—』で定着した[1]．

このように幾たびかの改題にもかかわらず，いずれのタイトルでもイデオロギー的なものが強調されている[2]．このことはテクストのモチーフを何より端的に表している．つまり，ここで語ろうとするのはキャラクター個人の出来事としての意味合いを超え，地政学的空間の歴史的問題につながっていくのだ，というふうに題名そのものからテクストが切り出されたといえよう．

当然ながら，従来の先行研究ではテクストのイデオロギー性に対しては受け止められてきた．けれども，それを析出する方法はいささか短絡的だった感じが否めない．要するに，テクストの副題で提示されていることもあって，民族主義的な文脈で「日本統治」への批判的側面を性急に読み込んだ上で，主人公の持つ孤独感をイデオロギー的に意味づけようとすることが多かったのである．例えば，彭瑞金は以下のように論じている．

> 呉濁流は胡太明の思想淵源が祖父の「胡老人」，「彭秀才」に発することをわざと設定する．それは世代交代により受け継がれていく，薄弱なる「中原意識」が生活の装飾品にすぎず，実質的な意味を有していないことを示したかったからではないか．生存の法則の下においても，胡太明のメッセージ性は正しく孤児意識にあり，つまり歴史の潮流が生み出した台湾人意識の覚醒にあったのだ[3]．（訳は引用者）

テクストにおいて，主人公の胡太明は幼い頃から中国伝来の私塾で「漢学」を学び，後に日本の近代的学校教育を受けた知識人として設定される．後者と比べると前者の教育を受けた期間はずっと短いわけだが，太明は「漢学」を受容させた祖父胡老人を尊敬しており，生涯祖父の示す「中庸」の精神を信念あるいは行動の拠り所としている．こうして，民族的出自においても思想の淵源においても源を中国に見ることができる点は，彼を造型する作者の「祖国愛」の具象化として考えられてきた[4]．

その前提の下で，彭は太明の孤独感の生成を主に中国との歴史関係から追究していく．彼の考えによると，十六世紀中葉に移住者たちが移住先を台湾へと決めて大陸を出た時にある種の「孤児（棄民）の自覚」がすでに萌芽し，そしてそれが清朝政府の台湾割譲を経て次第に強まっていくのだ．一方，それに相反して「原郷」の中国に対するノスタルジーが消えていく．そのため，

祖父から受け継いだ太明の「原郷意識」は極めて薄弱なるものとしか考えられなく，実際の中国行で更なる「反省」―つまり，再び部外者として排除されたこと―を遂げると，その「原郷意識」もたちまちなくなってしまうと指摘する．

このように，太明の「孤児」化過程の中で，日本とはただ植民地統治者として，祖国の中国を再認識するきっかけを増幅させる以上の役割を果たしているとは考えられていない．なお，これは彭に限るのではなく，テクストに注目する先行研究者たちに共通する姿勢でもある[5]．すなわち，まず日本を後景に退け，その前提において中国との葛藤を議論しながら孤立された太明を浮上させる方法が支配的だったのである．

しかし，太明にとって日本とは，果たして，一義的にしか意味づけられないのだろうか．むしろ日本は，中国が祖国としての理想像と過酷な現実の姿を同時に有すると同様に，一方で憎むべき植民地統治者でありながら，しかし他方では憧れ，同一化を果たしたいと望む対象でもある，という二律背反性を持つものと考えるべきではないだろうか．この点を見逃したまま太明の孤独感を導き出し，且つそれをいわゆる「台湾人意識」と等式で結びつけることは無理がある上，ジレンマに突き当たるかなり危険な作業といっていい．

以上の問題意識に基づき，本稿はテクストにおける台湾・日本・中国という三項の地政学的配置を検証しながら，それによって編み上げられた台湾の〈近代〉を読むことを目的とする[6]．そこで，一つの試みとして，太明の恋愛関係に焦点を当てて検討してみたい．

二　二極に引き裂かれる〈精神〉と〈肉体〉

太明は師範学校を卒業したあとで，「K公学校」に教師として赴任する．そこで，彼は同期の日本人女性内藤久子に出会い，彼女に対し次のような思いを抱く．

> 「ああ，あの白い足！」
>
> 太明は，眼がくらめく思いでつぶやき，眼を閉じた．眼を閉じても，その白い足は，妖しい曲線を描いて，彼のまぶたの裏側でなまめかしく舞いつづけた．それは，ふくよかでかぐわしい日本の女性の足だった．そして，白い胡蝶のように風の中にヒラヒラと舞う手ぶりの面白さ！　太明は，いつか学芸会の時，久子が白衣をまとって天女の舞を舞った時のことを思い出していた．(pp.44–45)

これは，太明が伴奏を担当し，久子ともう一人の台湾出身の女教師瑞娥と三人で子供たちにダンスを教える場面の出来事である．「白い胡蝶」といい「白衣」の「天女」といい，彼は久子の美を抽象的に捉えている．しかも，それは実際目の前にある光景というより，「眼を閉じ」たままの心象的なものといえよう[7]．

対するに，瑞娥への目線は次のようなものである．

> 「だめ，先生調子が合わないわ」
>
> 軽くにらむように言った．なじるというより，むしろ媚びをたたえた眼の色であった．

「ああ，どうかしているんだよ」

太明は，投げやりにそう言って，オルガンの上に頬杖をつき，ぼんやり遠くを眺めた．その視線の片隅に，かるく喘ぐように息づいている瑞娥の乳房のあたりが見えている．触れるほどの近さであった．(p.43)

先のシーンの直前に，瑞娥は太明の放心状態に気づき，「汗をふき」ながらそばにやってくる．ここでは，瑞娥という女性は太明にとって目付きや肉体の「媚び」が何より目立つようだ．「にらむ」目や「息づ」く「乳房」というように，太明は瑞娥の肉体のダイナミックな生命の躍動感を真っ正面から受け止めている．これは，久子を見る際には決してない眼差しなのである．

実際，太明の捉える以上のような，日本人の久子と台湾人の瑞娥との対比は彼女たち二人の場合に限ってあるものではない．テクストに登場する，太明の恋愛関係に関わる台湾人女性が瑞娥一人のみだから比べようはないとしても[8]，久子に対する捉え方はテクストの日本人女性全般に当てはまるのである．

太明は久子に失恋した苦痛から逃れるために日本に留学する．留学期間中，彼が日本人女性へ送る目線は依然として憧憬的である．例えば，「香り高い文化が感じられ」る京都では，「教養」が高いように見える「若い女性の優美さ」に太明は「胸がワクワク」する．また，彼は東京の下宿先である「未亡人の家」では，台湾人という身分でも「分け隔て」られた待遇を受けなかった．そのことに感激する一方，「久子よりもさらに美しく，教養もありそう」な娘鶴子に恋心がほのかに芽生える．そのきっかけとなるのは，下宿先の二階から鶴子の琴の音を耳にし，彼女の「淑やかな美しさ」に気付かされた時からである．

このように，太明が基本的に日本人女性を肉体を通じて理解しないことは明らかである．久子にしろ鶴子にしろ，彼女たちの美は「教養」といった言葉で強調され，いわば〈精神〉的なものだといえる．さらに興味深いことに，それは日本についての描き方と非常に相似しているものなのだ．

先の引用では，太明は久子の「白」さを取り立てて描写する．実は，「白」という言葉はつねに日本と連動して登場するのだ．例えば，太明は幼い頃従兄弟からいわゆる「日本の匂い」を次のように感じていた．

…志達は巡査補で“大人”と呼ばれ，日本語を知っていた．どこへ行っても羽振りがよく煙草は敷島を吸い，真っ白いハンカチーフをつかい，香水の匂いをプンプンさせていた．そんな白いハンカチーフで汗を拭くなど，いなかものにはひどくもったいない気がするのだった．おまけに志達が通ると，シャボンのような，さわやかな匂いがプンと漂った．それはいなかものたちが“日本の匂い”と呼んでいる一種の文化的な匂いだった．(p.23)

もっとも，テクストの中で志達は権謀術数をめぐらす節操のない人物として描かれている．にもかかわらず，幼少の太明はそうした志達に幾分の「軽薄」さと同時に，「新しい時代の風」「文明の波動」のようなものを確かに感じ取っている．そのため，太明は「公学校」に入学するのを

待ちこがれ，また入学後，「新しい文化人として成長した」自分を誇ることとなる．ここで「日本の匂い」あるいは「文化的な匂い」をイメージさせるには，「真っ白いハンカチーフ」や「さわやかな匂い」のする「シャボン」など，清潔感を示すものが取りあげられている．「白」と日本，という連想のパターンの端緒がここに見られ，そして，不思議にも日本人女性を捉える際に投影されていくのだ．

一方，瑞娥に対する描写には台湾そのものが表象されている．まず，太明は瑞娥の肉体を「媚態」といって好意的に受け入れないことが確認される．ただ，留学の見送りに来た瑞娥を「常になく垢抜け」し，「クルーベ浜の近代的な明るい風景に調和してい」るものと見て感動する場面が一度ある．けれども，それもまた，瑞娥にしては「常に」ある姿ではない点が書き込まれている．つまり，ふだんの瑞娥は〈肉体〉的側面のみ捉えられており，太明の目には〈近代〉的なものとかけ離れた存在にしかすぎなかった．

次に，台湾の描き方を引き合いに出してみよう．端的に言えば，台湾に関してもっとも特徴的とされているのはその卑俗さだったのである．例えば，冒頭部分では，胡老人は太明を連れて雲梯書院に行く途中，茶摘み女たちの「卑俗な山歌」や「淫らな笑い声」が聞こえ，「士君子や読書人」が卑しむべき「風儀の悪い所」だという．この他にも，太明が家族や故郷の人々の無知，または「のろのろ」する所に失望する描写が見られる．

さらに次の例を加えると，台湾の意味が一層明晰となる．太明は久子からの拒否で，「君去りしのちの天地の虚しさよ」と嘆いて落ち込む．しかし，彼の目に「虚しい眺め」として映っていたのは久子のいない台湾の大地であり，対するに「新生」の「光明が宿」る場所として日本を期待しているのだ[9]．そこで，太明は「青春の哀愁」を感じながら，「一筋の救い」を夢見て「ふるさと」と瑞娥に「さようなら」を告げた．これは，台湾が太明の精神を癒すのに無力であることの一側面を表しているのではないか．

ひとまず整理すれば，太明の女性を捉える視線は，本質的に，〈肉体〉的なものと〈精神〉的なものに分かれている．前者が台湾人女性に向けられるのに対し，後者は日本人女性に向けられているのが特徴的である．また，その相違も実は，彼が見た台湾と日本との差異と相応じているものといえる．すなわち，〈肉体〉的＝〈前近代〉的である台湾と，〈精神〉的＝〈近代〉的である日本と，それぞれ見事に役割分担を果たしているのである．

ところで，以上のような構図は太明内面の自画像として読めないだろうか．

先にも少し触れたが，太明は自分に好感をもつ瑞娥の媚びるようなしぐさを「わずらわしくうとましい」ものとして拒んでいた．その理由は，簡単に解釈すれば，久子への思いに胸がいっぱいだからである．しかし，太明は「からだごとぶつけてくる」のが瑞娥ではなく，「久子だったらなあ」とはかない思いを働かせている．また，久子に告白する際，彼女の「あえぐような」唇の存在の近さを感じながらも，「永遠に触れることのできない禁断の果実」として怯え，奪えなかったのだ．つまり，太明は久子にそういわれる以前から，すでに二人の間の「民族のちがい」を十分意識しており，しかもその「民族のちがい」とは肉体あるいは血の相違に基づくものであろう．

以上のことを関連して考えると，瑞娥は単純に三角関係での第三者という役割を示すだけではない．むしろ，彼女とりわけその肉体は，太明に台湾人である自らの肉体を想起させる意味において太明と久子との阻隔を成すものと考えられる．台湾人の血が流れている太明の肉体こそ，久子を決定的に隔ててしまう要素にほかならない．そのため，太明は生き生きとした瑞娥の肉体を疎まずにはいられなくなるのではないか．

総じて，久子と瑞娥との相互制約を，太明の内面における日本と台湾とのいがみ合いと理解すると興味深い．すなわち，太明が自らの〈台湾的肉体〉を意識する限り，日本に近づくことは無限に不可能である．一方，太明が自らを〈日本的精神〉の体現者と見なす時，台湾を素直に受け入れることは困難である．このようなアンビバレンスにこそ，太明の「孤児」意識の出発点があったのではないか．

ただし，太明は久子に失恋した時点及び日本に赴いたあとでも，自ら内面の矛盾解消に積極的に取り組んでいこうとしなかった．そもそも彼が日本留学を選択したこと自体，〈台湾的肉体〉と〈日本的精神〉とを対決させなかったわけだと読み取れる．日本に滞在する間，太明は友人から『台湾青年』[10] の同人加入を勧誘されたが，「政治運動」を「どうすることもできない」ことと疑問を感じて断った．また，彼は鶴子への気持ちを「女性のことは思うまい」と戒めながら押さえようとする．政治上の権利云々をいうと，台湾人である意味を日本に問いかけざるを得ない．と同様に，鶴子の愛情を求めようとすれば，久子の時と同じく「民族のちがい」の壁にぶつかることとなる．そこで，彼は上述した〈肉体〉と〈精神〉とのズレを抱えながら，次の段階に突入していく．

三 「中庸」への憧憬

太明が中国行を決心した契機は日本の経済的搾取政策により祖先の墓地が危ぶまれ，母がそれを制止しようとした結果日本人に頬を殴られた出来事にあった．その事件では母は肉体の傷を受けるところまでいかなかったが，対するに太明は「心」に「深い，癒えることのない」衝撃を受けたという． 一方は〈肉体〉の出自である祖先と，もう一方は〈精神〉の拠り所である日本，この両者の衝突が必然的に避けられないことは太明に反省を促す．その過程で，中国が新天地として弁証法的に要請されてくるのだ．

> …（上海女学生の一引用者注）優美な上海靴，靴下，ハンドバック，上衣から下衣まで自分の趣味に統一されて色合まで吟味されていた．所謂，儒教でいう中庸のよさで，極端に走らず欧米の文化を鵜呑みに取り入れるのではなく，自分の伝統を生かしているところに中国女性の理性がありありと見られるのであった．彼はいつまでも女学生に見惚れていた．きめの細やかさ，肌のなまめかしさ，生き生きとした眸，彼はしばらく恍惚としてしまった．何となく彼女達を自分の社会よりも遥かに高い貴族のようなお嬢さんに感じた．（p.132）

これは上海に到着した太明が捉えた現地の女性像である．彼はそこに「古典的な幽雅さを近代文明に生かしている」美しさを発見し，大いに惹かれた．しかも，それは身なりに限るのではな

く，しゃべり方までも「台湾人女性」にはない「緩い調子」で，かつ「慎しやか」で「洗練された味」だったのである．

その後，太明は目的地の南京に赴いた列車の中で，靴を履いたまま無造作に座席を踏んだ淑春という女性に一目惚れした．二人はのちほど太明が非常勤を務める日本語学校で再会し，交際を始める．最初のデートで，淑春は約束の時間に遅れ，「呼吸をはずまし」ながら，「いきいきと」「瞳」を輝かせて詫びる．また，「旗袍」を着て書画に対する「鋭い文明批評」を行う姿が描かれる．太明から見ると，彼女もまた上海の女性と同じ，〈伝統〉と〈近代〉とを取り合わせた一人であるに違いなかった．

ここまでだけを見ると，太明の中国人女性を見る目線は，日本人女性へのそれと台湾人女性へのそれとを両方兼ねているといえる．要するに，そこには日本人女性が放つような「文化」の「高い香気」が感じられると同時に，「肌」「眸」など台湾人女性に勝るとも劣らない肉体美が細かく捉えられている．逆にいえば，そこからは，かつて日本人女性の肉体を直視し得なかった「息苦し」さもうかがえなければ，台湾人女性に精神的側面の不十分さを批判するような厳しさも全くうかがえないのだ．

さて，そういう眼差しは，一方，太明が中国人女性を血の隔たりのない同じ民族として見なす点を示し，もう一方では，彼の抱く中国憧憬のありようとして受け止められよう．

というのは，彼のような，祖父に影響され，生涯「中庸」を崇高の価値と見て行動する人物は，同じ言葉の「中庸のよさ」をもって淑春の魅力を形容する．この間の関連性は見逃せない．つまり，テクストにおいては，「中庸」とは単純に「漢学」また中国を代表する「中正不易」の学問を意味するのではない．それよりも，〈伝統〉と〈近代〉と―もっと具体的にいえば，〈中国的（肉体的に限っては，＝台湾的）肉体〉と，〈西洋的（テクスト中多くの場合，ほぼ＝日本的）精神〉と―相反する二面性を調和する，というより深い意味合いとして読まれなくてはならない．このことは，太明が中国に赴いた契機によっても説明できる．また，彼が「健康」で「趣味」の一致する，いわば〈肉体〉と〈精神〉とが一致する女性として「中庸」的に見える淑春を想定し，そこで久子，瑞娥らとの過去を批判的に振り返ることからも裏付けられよう．

四　ジェンダー化される空間

ところで，太明のいう「恋」とは，単純に男女の愛を指すより以上に深い意味が含まれているのではないだろうか．そもそもテクストにおいては，〈女性〉という記号は女性それ自体のみならず，その女性が帰属する大きな枠組みを示す意味も同時に付与されている．つまり，日本人女性と日本，台湾人女性と台湾，そして中国人女性と中国，いずれの組み合わせにおいても前後両者の捉え方が響き合っていることが確認できるのだ．そこで，太明の女性認識は彼の空間認識につながるものであり，またその恋愛関係も地政学的空間をジェンダー化したものと読むことができる．

とりわけ，太明と日本人女性との位置関係はオリエンタリズムの逆照射のように読み取れる．もっとも，テクストにあるのは，支配側が男と，被支配側が女という通常の構図に反して，台湾

人の男性と日本人の女性という設定である．しかし，太明は日本人女性の美を官能的には捉えようとしない，いや，捉えられないといったほうが適切であるかもしれない．このことは，自分を男として位置づけ得ず，もしくは〈去勢〉された男として日本人女性の前に立つしかない太明の姿を表し，支配者に対し被支配者の呪われた立場を説明するものとなる．

一方，台湾の内部にまでジェンダーの構造が見事に組み込まれている．中国へ赴く際の港で，太明は次のように瑞娥のことを思い出す．「もしその女性と結婚でもしていたら，自分も田舎に満足して幸福であったかもしれない」と．前述したが，太明は瑞娥の根強い土着性を受け入れるのにためらいがあった．ここでは，後悔の意が感じられるとはいえ，「幸福」の条件付きとして「田舎」が付け加えられることは見逃せない．つまり，太明はつねに瑞娥の女性性を〈肉体〉的または土着的と忌避し，その対極に男性としての自分の〈精神〉性を置くのである．このことは，テクストにおける〈精神〉と〈肉体〉の明らかな優劣関係を確認することになる．と同時に，太明と，日本人女性，さらに中国人女性との力関係を逆説的に表すものでもある．

そして，中国人女性の場合，太明は淑春に結婚の申し入れを一旦は拒まれたが，その後彼女の悔い改めを契機に結婚を果たした．一見，バランスのとれた位置関係のようだったが，それも次第に破綻していく． 新婚生活が終わると，太明は淑春の本当の姿に驚くばかりだった．彼女は「慎み」を脱ぎ捨て，ただの「けたたましい淫らな笑い声」を立てる物欲主義者にすぎなかった．しかも，裏では「麻雀」や「芝居」，「ダンス」など「頽廃」を極めた生活をしているにもかかわらず，表に出ると「新生活運動」「男女平等」「抗戦救国」などを率先して主張する等々矛盾の行動に走る女でしかなかったのだ．

唐突な展開のようであるが，実はこれを予告する伏線は早くも太明が上海に着いた時点ですでにあった．次の引用では，上海の街の風景がこう描かれている．

> そこには欧米的なもの，中国的なもの，そして日本的なものまでが同居して雑然とした不調和の調和を形成しているのだった．彼はまた共同租界をさまよった．そこでは，人間性を抹殺した金権主義の怪物のような高層建築物が風景を圧し，そのあいだを，人と車の激流が狂奔していた．(p.133)

さらに，この続きでは，上海は「人間のあらゆる慾望の坩堝」と受け止め，そこに「人間の魂」を「麻痺させる」ものはあるが「安ら」かにさせるものはないと形容される．ここで浮上するのは，明らかに，〈近代〉のもたらす衝撃の余り，バランスを崩した租界都市像にほかならない．

もとより，太明のもつ中国憧憬は漢籍古典の読書を通じてのみの「観念的」なものにすぎなかった．それゆえに，彼は「現実の生きた中国の姿」を目にしたとたん，自らの「中国に対する予備知識の浅さ，古さ」に驚きを禁じ得なかった．なぜなら，中国とは「中庸」的であるどころか，〈近代〉と〈伝統〉とのいがみ合いを到底免れられないものだからである．この点は，淑春についてもいえよう．その彼女を，太明は「社会進化の過程における一つの避けられない」「犠牲者」と同情する一方，結婚に後悔せずにはいられない．

…彼は毎晩一人淋しく妻の帰りを待った．どうしても寝られない夜は，思いをホールへ馳せるのであった．今頃，ジャズに合わせて若い男と腕を組んで踊っている場面を想像すると，みだらな憎悪心さえ湧いて来るのであった．彼はふと鶴子のことを思い出して，もしも鶴子と結婚したらこんな辛い目にも会わずに幸福に暮せたかもしれない，と思った．(p.165)

このように，太明は次第に夫としての権威を失い，他の男性の存在に脅威を意識せざるを得なくなる．言い換えれば，彼は男という性を与えられているものの，淑春に対し男性的な，あるいは支配的な位置づけを得ることは到底できないのだ．この点は，肉体的に隔たりがあるのを除き，日本人女性との関係性とかなりの類似性を見せている．

五　近代的な暴力

ところで，先の引用では，太明は改めて鶴子のことを思い出す．かつて，鶴子のお母さんが二人の交際を暗黙に承知しようとしたが，太明は「気がひけて」受け入れることができなかった．その理由は，二人の「民族のちがい」ということで彼女にコンプレックスを持っていたためと思われる．にもかかわらず，この時点になって彼はかえってそれを悔しがる．このことは何を意味するのだろうか．

ここで一度，太明における日本の意味を確認しておこう．それは，紛れなく統治者ではあるが，一方では文明の指標を果たす存在でもある，という両面価値的な機能を帯びるものに違いない．というのは，日本は太明が「文化人」また「知識人」として向上するのに常に必要なものであり，そこには〈精神〉性が付与され，自らの台湾人としての〈肉体〉を従属させてきたからである．なお，たとえそうした従属関係がいったん日本留学後の就職難や前述の祖先の墓地破壊事件で破綻をきたしたとしても，太明は日本を根こそぎ否定できたわけではない．そればかりか，中国滞在中生計を立てるため日本語教師を兼務し，それが縁で淑春と再会したり親日の汪兆銘政権下の青年外交官と交遊したりするという点において，彼は自らを日本の枠組みから突き放すことのできない身になっていたといっていい．このことは，自分の矛盾を止揚してくれると期待していた中国にかえってリアルな〈近代〉の矛盾を露呈しているという挫折を味わうと，鶴子への思いがおのずとよみがえってくることからもうかがい知ることができる．しかしながら，日本との葛藤は，まさしくそこから深層へと絡んでいく一方である．

不幸な結婚の上に，太明は台湾出身ということでスパイ容疑者として監禁されたが，「日本籍民」として日本人船長の助けを得て中国から帰郷する運びとなった．けれども，太明を待ち受けていた現実は厳しかった．故郷自体は建設が進み，「文明の匂い」を取りこんで「新しくいきいきとして」いるようになったが，襲いかかってくる日中戦争のかげに「暗」く包まれてもいた．そういう状況の中で，太明は特高警察から尾行をされ，その上戦局が激化すると軍属徴集を免れられず，再び戦場となる中国大陸に渡った．

広東にある部隊では，太明は通訳の仕事を担当していた．そこで，抗日テロリストの取り調べに立ち会い，勇気凛々と「祖国に殉ずる」犯人たちを見て「はげしい精神の動揺と自責に心を苛

まれ」た．さらに，あるテロ隊長が処刑された場面を目撃したショックで心身を病んでしまい，台湾に送還されることとなった．〈精神〉的な衝撃，また，それに連鎖的に引き起こされた〈肉体〉的な苦痛．太明は完全に「精神と肉体との均衡を失ってい」た．今までメタファーの構造でしか表されなかった太明の矛盾，すなわち，始終かみ合わない〈精神〉と〈肉体〉の問題がここで端的に語られている．しかも，その問題は，労働奉仕を強いられた弟の死により太明が狂気となったまま失踪する，という結末が示すように，テクストの最後まで繰り返し強調されているのである．

ここにきて，太明に内在する〈精神〉と〈肉体〉の離反がますますエスカレートし，そして太明自身もその原因をより批判的に見つめ始めたと考えられる．軍属徴集または労働奉仕を自分や弟に強制したのは，日本である．また，その日本によって同じ民族の中国人や，血を共有する弟らの〈肉体〉が殺されてしまった．これらの事実を前に，日本を〈近代〉的，〈精神〉的として無条件に憧れてきた太明としては，〈精神〉の動揺を感じざるを得なかった．しかし，だからといって，〈肉体〉が〈精神〉との長いせめぎ合いに勝ち抜いたというわけではない．なぜなら，〈精神〉への否定が起こるたび，体が病む，もしくは，姿が消えるといった連鎖反応が認められるからだ．この点から，太明の自己が〈精神〉と〈肉体〉との両極に引き裂かれ，永遠のジレンマに陥っていることを見て取ることができる．加えて，この太明の中に近代日本の暴力性をも読み込むことが可能なのではないか．

そもそも〈精神〉と〈肉体〉を分節化するのはデカルトに始まり，十八世紀以来西洋の思想の流れに大きな影響を与えながら支配してきた極めて近代的な発想である．一見合理主義的な二元論ではあるものの，結局のところ〈肉体〉を〈精神〉に従属させるものにすぎなく，しかも，そこには〈西洋〉対〈東洋〉，あるいは〈文明〉対〈野蛮〉という植民地主義的コードに変換されるような暴力性が常に内在している．一方，近代日本が打ち出した植民地支配の諸理念にも，上述した図式の援用がうかがわれる．例えば，被支配民族に対し，自らが「君民同祖」の「血統団体」である点をもってその肉体を差別する一方，「日本語」を通じて「日本精神」への感化を強請する，いわゆる「皇民化政策」という言語的同化政策などがそれである．この意味において，テクストが上述した分節を内包しているのは，非常に注目に値するべきことであろう．なぜなら，それは，近代日本の枠組みで育てられた一人の台湾人作家が，自らをおとしめるために生産されたイデオロギーにのっとられつつも，その二分化構造への強い批判が込められているといえるからだ．

ただ，見逃せないのは，太明が日本否定を強めていくうちに，台湾の土着性に親しみつつある傾向があるという点である．今まで，知識人や地主という身分で村の人々から特別扱いされ，自らも常に彼らとの隔絶を意識してきた太明ではあるが，戦争のもたらした食糧難に周りの農民たちとともに直面することで，お互いに心を温めるような連帯感を深めていく．また，桜や紅葉の美しさよりも無花果や「台湾連翹」の力強い生き方に惹かれるようになったり，発狂する際にかつて卑しんだ「山歌」を歌ったりするところから，太明はそれらを台湾独自の〈精神〉性として次第に肯定していく兆しが見える．このように，今まで〈肉体〉性としか意味づけられなかった

台湾にも〈精神〉性が見出され，〈精神〉と〈肉体〉という対立を解消していく衝動が書き込まれている．これは，つまり，新しい〈近代〉のネーションとして台湾が，〈アジア〉の中で孤立しながら想像されていく可能性を示しているといえよう．

六　おわりに

以上本論では，『アジアの孤児―日本統治下の台湾―』というテクストにおける，主人公の男性知識人が抱く台湾，日本，中国出身の女性への感情を中心に分析してきた．そしてそれが主人公の三つの地政学的空間に対する心理的な距離のメタファーであることを確認した．最後に結論として，台湾の持つ孤独感のダイナミズムを記述するために日本と中国とを同様に前景に出して捉え直すことで始めて可能だということができる．つまり，日本は異民族としての支配者であった反面，〈近代〉的精神を呈示する，いわば憧れの的でもあった．これに対して中国は，古典を通じて「中庸」を体現する存在と想像されつつも，現実ではリアルな〈近代〉の矛盾をはらんでいるものと認識された．そこで，それぞれの枠組みと関わっている位相を記録していくと，「孤児」，もっというならば，日本や中国と同様に〈近代〉的になっていく台湾の姿が照らし出されてくるのだ．

しかし，テクストにおいて台湾がナショナリズムの道を歩むというのはあくまで一つの可能性に止まっているといわざるを得ない．なぜならば，テクストの最後では，主人公が発狂してどこかに消えたというなぞの結末になっているからである．それ自体は，主人公の行方に喩えられている台湾，及びその日本と中国との位置関係をくらますこととなる．したがって，本論ではひとまずそれを〈精神としての日本〉対〈肉体としての台湾〉という観念に引き裂かれた結果であると意味づけておきたい．

一方，呉濁流はこれ以降，敗戦後の日本と日本にすり替わって台湾に君臨する中国と，そしてそのはざまを生きる台湾といった三項関係を，同じくジェンダー化しながら描き続けている[11]．それらのテクストとあわせて考えれば，以上残された問題が解かれるのではないかと思う．このことについては，次稿の課題にしたい．

注

1）本稿は『アジアの孤児―日本統治下の台湾―』（新人物往来社，1973,5）をテクストとする．それぞれの版本間の差異は次の課題として改めて問うことにしたいが，本稿で言及するところと関連していうと次のような点が挙げられる．まず，初出の『胡志明』（台湾・国華書局，1946,9，未完）と新人物往来社版とは，主人公の名前には違いが見られるが，その家族構成や経歴の設定においては一致している．ただし，後者のほうがより洗練した描写や場面構成の分節化をうかがえる．なお，初出では第二，第三の篇名が「悲恋の巻」，「悲恋の巻（大陸篇）」とつけられたように，主人公の恋愛関係は大きなモチーフだったことが分かる．一方新人物往来社版では，篇名が削除された上に恋愛関係についても新たな整理が認められる．にもかかわらず，それは依然としてテクストを読み解くのに重要な手掛かりを孕んでいるといえる．『胡志明』は現に天理大学に所蔵されており，下村作次郎先生のご協力により一読ができた．他の二版『アジアの孤児』（一二三書房，1956,4）と，『歪められた島』（ひろば書

房，1957）は未見.

2) 初出の題名「胡志明」とは，漢民族が作った王朝「明」を「志」す意味で作られ，そこに異民族統治者の清朝，ひいては日本に対する反発の気持が潜んでいると読み込まれた．詳しくは彭瑞金『台湾文学探索』（台湾・前衛出版社，1995,1）207頁を参照.

3) 前掲彭瑞金『台湾文学探索』208–209頁.

4) テクストの内容を彷彿させる自伝「無花果」の中で，呉濁流は，自分が「もっぱら日本教育を受けて大きくなった」が，心の中で祖国を「漢民族」の作った「民国」とする，というふうに民族主義を前面に打ち出す．その考えによると，異民族統治下の植民地の人々にとって，「民族意識」とは「抽象的」「観念的」にすぎないかもしれない．が，それを秘めることは植民地統治者に対し最大限の反発になるのだという．「無花果」（『台湾文芸』19–21号，台湾文芸雑誌社，1968,4–10，『無花果』，台湾・林白出版社，1970,10）は中国語で発表された作品で，冒頭部では以上のような叙述がうかがわれるものの，後半では当時タブー化されていた「二二八事件」に触れたため，発売禁止の処分を受けた．なお，本稿が参考にしたのは，『夜明け前の台湾—植民地からの告発—』（社会思想社，1972,6）に収録された日本語訳である.

5) 例えば，黄娟の「台湾人的命運—再読《アジアの孤児》—」（前掲『台湾文芸』53期，1983,8，同氏著『政治與文学之間』所収，台湾，前衛出版社，1993,5）がある.

6) 従来の研究では，〈台湾〉と〈日本〉と〈中国〉と三つの記号はいずれも一義的に扱われていた．本稿はそれを疑問視することから出発し，それぞれの関係性を明らかにしながら新たな意味づけを試みたい．そのため，厳密に各々の言葉に括弧をつけるべきだと思われるが，便宜上，本文中では省略させていただきたい.

7) 初出では，このシーンを含み，久子ら日本人女性を描く場面は本稿が依拠する新人物往来社版のテクストとの間に違いが二，三見られる．要するに，そこでは日本人女性の美が抽象的にだけではなく，肉体美など具体的にも取りあげられていた．加えて，日本人女性に対する太明の憧れは赤裸々に描き出されていた点が特徴的である．これらの点から，作者がその中の精神的部分のみ抽出し，それをもって日本人女性の存在を含蓄のあるものに仕上げようと大幅に加筆したことは明らかであろう．このことは，本稿で提出する〈日本人女性＝精神的＝日本〉という図式の妥当性を裏付けることとなる.

8) 初出ではもう一人の台湾人女性月英が描かれた．それは，日本留学を終えた太明が仕事の見つからなかった時期に，妹の同級生月英に同情めいた愛情を持ち始めるというあらすじだった．けれども，日本で出版されるにあたって，内容が冗長になるといった理由で割愛されることになった．この部分の切断は非常に重要な意味をもつ．なぜなら，そうすると，太明は終始台湾人女性に恋したことがなくなるからである．もっといえば，このことは，太明はなぜ台湾人女性を愛せないのか，という問題を興味深く残してくれたのである．なお，以上の段落は中国語に訳され，「糖扞仔」という題で『呉濁流集』（台湾・前衛出版社，1991,7）に収録されている.

9) 主人公の苦境を脱出する出口として日本，あるいは日本留学に設定するのは呉濁流に限らず，日本語作家に多く見られる大きな特徴だといえる．拙稿「《南方》の発見—台湾の日本語文学試論—」（『広島大学教育学部紀要』第2部第46号，1998,3）を参照.

10) 『台湾青年』とは1920年7月から1922年2月にかけて合計4巻2号が，東京にある台湾青年雑誌社より出版された雑誌である.

11) 呉濁流の作品には，国家のジェンダー化が読み取れるものとして『アジアの孤児』の他に『ポツダム科長』（1948,5，新学友書局，『泥濘に生きる—苦悩する台湾の民—』所収，社会思想社，1972,11）というものがある．『ポツダム科長』は，「本省人」の女性が，日本敗戦後「漢奸」の罪を逃れるために中国大陸側から渡台した「外省人」の男性と恋に落ちて結婚した後，夫本来の醜い姿に気づいて後悔してやまないというあらすじである．彼女が後悔していることの一つには，かつて「若くてスマー

トで教養のある」「日本人の医者」のプロポーズを「民族の違い」であろう理由で受け入れなかったことがある．明らかなことに，これもまた，台湾，日本，中国三地の空間を男女の関係にたとえて描かれたものといえよう．しかも，これらの作品で共通していえるのは，主人公が中国と日本のどちらをも一時は〈精神〉的とあがめていたという点である．しかし，一方に対する憧憬が幻滅しかけた際，もう一方がそれに取り代わって浮上するという構造を見ることができる．